洋１４－２

「ハンガー・ゲーム２」　❄❄❄

２０１４（平成２６）年1月４日鑑賞＜ＴＯＨＯシネマズ西宮ＯＳ＞

監督：フランシス・ローレンス
脚本：サイモン・ボーフォイ、マイケル・アーント
原作：スーザン・コリンズ
カットニス・エバディーン（第１２地区の勝者）／ジェニファー・ローレンス
ピータ・メラーク（第１２地区の勝者）／ジョシュ・ハッチャーソン
ゲイル・ホーソーン（カットニスの相棒）／リアム・ヘムズワース
ヘイミッチ・アバナシー（カットニスとピータの教育係）／ウディ・ハレルソン
エフィー・トリンケット（キャピトルの住人、カットニスの付添人兼ＰＲ担当）／エリザベス・バンクス
シナ（カットニスのスタイリスト）／レニー・クラヴィッツ
プリムローズ・エバディーン（カットニスの妹）／ウィロー・シールズ
プルターク（第７５回ハンガー・ゲームのゲーム・オーガナイザー）／フィリップ・シーモア・ホフマン
ビーティー（第３地区の勝者）／ジェフリー・ライト
シーザー・フリッカーマン（ハンガー・ゲームの公式テレビ・インタビュアー）／スタンリー・トゥッチ
スノー大統領（独裁国家パネムの最高権力者）／ドナルド・サザーランド
フィニック・オデイル（第４地区の勝者の美青年）／サム・クラフリン
マグス（第４地区の勝者の老女）／リン・コーエン
ジョアンナ・メイソン（第７地区）／ジェナ・マローン
ワイレス（第３地区の勝者）／アマンダ・プラマー
エノバリア（第２地区の勝者）／メタ・ゴールディング
ブルータス（第２地区の勝者）／ブルーノ・ガン
グロス（第１地区の勝者）／アラン・リッチソン
カシミア（第１地区の勝者）／ステファニー・リー・シュルント
２０１３年・アメリカ映画・１４７分
配給／ＫＡＤＯＫＡＷＡ

＜あのシリーズがイマイチなら、このシリーズもイマイチ＞

アメリカでは『トワイライト～初恋～』（０８年）に始まった『トワイライト』シリーズが大人気。しかし、私にはこの映画はイマイチ（『シネマルーム２２』未掲載分）で、２作目以降は観る意欲も失くしている。他方、『ハンガー・ゲーム』（１２年）は、アメリカ国内で４億ドル、全世界で７億ドルという爆発的な興収成績を記録したが、私の評価はイマイチだった（『シネマルーム２９』２３４頁参照）。

もっとも、『スノーホワイト』（１２年）でブレイクした『トワイライト』シリーズの主演女優クリステン・スチュワートはイマイチだが、『世界にひとつのプレイブック』（１２年）（『シネマルーム３０』３０頁参照）でブレイクしたジェニファー・ローレンスの方は断然グッド。『ハンガー・ゲーム』で私は、①「ハンガー・ゲーム」の基本ルールに、異議あり！②サバイバルとチームプレーは、矛盾するのでは？③ゲーム中の根本ルールの変更はなぜ・・・？という小見出しで問題提起をし、さらに、「予想どおり、更なるルール変更だが・・・」とその設定自体に異議を唱えた。しかして、第１作以上の製作費で作られた本作では、それらのルール設定（の変更）は如何に・・・？

＜なぜ革命のシンボルに？その深みもイマイチ＞

前作では、第１２地区から選出されて「ハンガー・ゲーム」に出場したカットニス（ジェニファー・ローレンス）とピータ（ジョシュ・ハッチャーソン）の２人が、「勝者」として生き延びる結果になった。それは、ゲーム終盤まで生き残ったカットニスがピータと共に毒の実を飲もうという、ロミオとジュリエットばりの覚悟と行動力を示したためだ。しかし、ハンガー・ゲームは１２の隷属地区から男女ひとりずつを選出し、全国にテレビ中継しながら、最後のひとりになるまで戦わせるものだから、そんなカットニスの行動は、明らかにルール違反。ところが、スノー大統領（ドナルド・サザーランド）が支配する独裁国家パネムに抑圧されている１２の隷属地区の人々は、そんなルール違反を犯してまでピータとの愛を貫き、スノー大統領に「抵抗」したカットニスに拍手喝采を送ったため、今やカットニスは革命のシンボルになっていた。

昨年１２月２９日にＴＢＳが『報道の日２０１３』と題して放映した「激動の平成四半世紀を振り返る」では、「ペレストロイカ」を提唱し実践したソ連のゴルバチョフ書記長が１９８９年５月に訪中した際、中国共産党内部で複数政党制、三権分立、表現の自由などの基本的人権の承認等を内容とする「民主化案」が極秘に検討されていたことが紹介されていた。もしそれが実現していたら、１９８９年６月４日の天安門事件の悲劇は生まれなかったのでは・・・？

本作の導入部では、スノー大統領が自らカットニスの家にまで足を運び、カットニスに「警告」を与えるシークエンスが登場するが、その警告とは？カットニスが革命のシンボルになっていくというストーリーは面白いが、その深みはイマイチ・・・。

＜ホントの恋人はどっち？そこもイマイチ＞

女１人に男２人という「三角関係」はよくあるモメ事。しかして本作冒頭では、カットニスの狩猟仲間で昔の恋人だったゲイル（リアム・ヘムズワース）と第７４回ハンガー・ゲームで共に生死を賭け恋人として戦ったピータのどちらがホントの恋人か、という問題が提起される。スノー大統領が第７５回という記念すべきハンガーゲームを、それまでの歴代勝者たちを戦わせる、いわばチャンピオン大会にしたのは、体よくそこで革命のシンボルとなりそうなカットニスを抹殺するためだった。

しかし、今回もピータと２人で出場することになったカットニスは、スノー大統領からの「警告」によって、ピータと恋人同士であることを演じなければならないことに。それは、前回共に毒の木の実を飲んだのは、反逆の意思ではなく、純粋にピータへの愛によるものであることを国民に信じさせるためだ。しかし、そんなことはカットニスの本来の恋人であるゲイルにとっては大きなお世話。その結果、恋のさやあて的紛争も発生するが、私の目にはそんなドラマの展開もイマイチ・・・。

＜本番開始前が長いのは、大みそかの格闘技と同じ＞

第７４回ハンガー・ゲームもそうだったが、歴代勝者の対抗戦となる第７５回ハンガー・ゲームも本番開始前の選手紹介がやたら長い。近年の大みそかは、ＮＨＫの紅白歌合戦に対抗して各種格闘技戦やボクシングのタイトルマッチが開催されている。２０１３年の大みそかでは、ＷＢＡ世界ライトフライ級タイトルマッチでチャンピオン井岡一翔が、過去１度もノックアウト負けをしたことがないという最強の挑戦者であるニカラグアのフェリックス・アルバラードから鮮やかな勝利をおさめたし、内山高志ＶＳ金子大樹の日本人対決も迫力があり、面白かった。しかし、これも本番開始前がやたら長いのが欠点だ。

さらに、今回のハンガーゲームに出場する１２組２４人の男女の顔ぶれをみると、８０歳の最高齢プレーヤーの女性マグス（リン・コーエン）まで登場する。彼女の武器は「千枚通し」とのことだが、ここまでくると「個性的」を超えて、漫画的に・・・。

＜「サバイバルゲーム」の看板に偽りあり！？＞

前作の評論でも私は「サバイバルとチームプレーは、矛盾するのでは？」と書いたが、『ハンガー・ゲーム２』でも、ゲームが始まる前から誰と誰が同盟を組むか、が大きなテーマとなっている。そして、ゲームが開始するや、たちまち数人は「ジ・エンド」となるが、カットニスとピーターが同盟を組んだのは第６５回ハンガー・ゲームに出場し、１４歳で勝者となった第４地区のフィニック・オデイル（サム・クラフリン）やマグス、ジョアンナ（ジェナ・マーロン）、ビーティー（ジェフリー・ライト）、ワイレス（アマンダ・プラマー）など数人。もちろん、この同盟軍（チーム）も他の同盟軍をやっつけた途端に同盟軍同士で殺し合わなければならない運命だが、これではホントのサバイバルゲームとはいえないのでは？

同じような設定の邦画『バトル・ロワイヤルⅡ／鎮魂歌（レクイエム）』（０３年）の方がその点はよほどシリアスだった（『シネマルーム３』３１３頁参照）。しかも、人間同士の殺し合いがいかなるシリアスさで展開されるのかと期待していると、スクリーン上にみる戦いの相手は①殺人電磁波②猛毒を含んで追ってくる濃霧③巨大な津波④狂暴な猿軍団等だから、これも大きく期待外れ。これでは、昨年の阪急・阪神ホテルズの食品偽装問題と同じように、１２の地区から選出された２４人の男女たちの「サバイバルゲーム」という看板に偽りあり、と言われても仕方がないのでは・・・。

＜この中途半端な終わり方は、一体ナニ？＞

ハンガー・ゲームの原作は、スーザン・コリンズの３部作の小説。したがって、第１作が映画化され大ヒットした時から、そのシリーズ化が決定されていたらしい。現に『ハンガー・ゲーム２』後の「パート３」は前後編の２部構成として、２０１４年～１５年に全米公開される予定とされているから、いわば本作はそれへの「つなぎ」となる作品だ。

第１作はルールについてさまざまな疑義がありながらも、あっと驚くルール違反を決行することによって、あっと驚く結末を迎えることができたから、それなりのインパクトがあった。しかし、その点「パート２」となる本作の結末は？それは、私の目にはあまりにも中途半端だ。「この後は来年以降に公開される「パート３」を観て下さいね」と言わんばかりの、この中途半端な終わり方は一体ナニ？これでは、大ヒットシリーズの第２作という売り込みは、ムリなのでは・・・。

２０１４（平成２６）年1月９日記